

## 《伴大納言絵巻》制作の背景に関する一考察

菅名悠（京都大学）

応天門の変を題材とする《伴大納言絵巻》（以下「本作」）については、これまで多くの研究が重ねられてきたが、本作がいかなる文脈において制作されたのかという問題に関しては、未だ定説を見ない。本発表では、本作において極めて重要な位置を占めるモチーフである検非違使を取り上げて考察を行い、本作の制作背景に関して私見を提示する。

本作において、検非違使は詞書に現れないにも拘らず多くの紙幅を費やして描かれており、特に彼らが本作の冒頭と末尾という、絵巻の構成上重要な位置を占めていることは注目に値する。さらにその描写は精緻であり、彼らの顔貌、乗馬、甲冑などは周到に描き分けられている。また彼らの人員構成や装束は、当時の規則に照らして非常に正確であることが先学によって指摘されている。これらのことから、本作の制作者が検非違使の描写に対して強いこだわりを有していたことが窺われ、検非違使の華々しい活躍を描くことに本作の制作目的の一つがあった可能性が想定される。

ここで、本作の検非違使の比較対象として取り上げるべきは、後白河院が承安元年（1171）に制作させた「後三年絵」に登場する源義家ら武士であると考えられる。この絵巻は現存しないが、その内容に言及する史料や、この絵巻を参照して南北朝時代に制作されたと目される《後三年合戦絵巻》により、その姿を窺うことが可能である。これらによると「後三年絵」は、朝廷から逆賊征伐の勲功を認められず空しく帰路に就く義家主従を描くことによって幕を閉じる絵巻であったと考えられ、彼らの姿は本作の検非違使と好対照をなす。また「後三年絵」では、義家らの残虐な振る舞いが繰り返し描かれ、さらに仏教絵画に由来するモチーフによって彼らの罪業を示唆する表現も見られる。またそもそも「後三年絵」の題材である後三年合戦は、源氏が著しく勢力を弱める契機となった出来事である。これらに鑑みると、この絵巻の制作背景に、源氏を否定的に捉える価値観が存在した蓋然性は高い。

では、本作の検非違使と「後三年絵」の義家主従の表現の落差は何を意味するのか。日本史学の成果によると、本作の制作時期と想定される 1170 年代には平氏が検非違使庁を掌握していたといい、当時の観者にとって検非違使は平氏の武力を象徴するモチーフであったとも考えられる。そうだとすると本作の検非違使は、源氏とは対照的に繁栄する平氏の武威を示しているという解釈が提示し得る。ただし本作は、平氏の武力を手放しで称揚しているわけではないと思われる。本作において伴大納言逮捕の判断を下したのは朝廷であり、検非違使はあくまで朝廷の命の下で働く武力装置として描かれていることには注意する必要がある。

以上を勘案して、本作は朝廷を支える平氏の武威を顕彰するという性格を有しながら、武士に対する朝廷の優位を表すという側面をも有していた可能性を指摘したい。